

る、仍て名付る、せきれいは尾を上下へうごかしむ、此鳥は尾を左右へうごかしめづらしき鳥なり、さへづりよし。

〔飼鳥必用〕朝鮮鶴鵠 一名砂雲雀と云

此鳥黃鶴鶴似て形白鶴鵠程あり、鳥の姿は頭薄黒、脊は鼠、羽頬より腹へ極黄色足は真黒、常の啼聲雲雀に似たり、掛ケ爪雲雀の如く至而長し、奇麗なり、此鳥は九州々間々風に寄渡る鳥也、薩州の内西海に宇治島と言島に見ゆる、西北の風に飛來る、何れにも朝鮮國の鳥と相違あるよし、

〔日本書紀一神代〕一書曰○中陽神○伊諾尊先唱曰、美哉善少女、遂將合交而不知其術、時有鶴鵠飛來搖其首尾、二神見而學之、卽得交道、

〔古事記中神武〕爾大久米命以天皇之命詔其伊須氣余理比賣之時見其大久米命鯨利目而思奇歌曰、阿米都々知杼理麻斯登々那杼佐祁流斗米、

〔古事記傳二十〕都々は鶴鵠の一名称、アラムカ、されど其意は未思ひ得ず、

〔古事記雄略〕天皇坐長谷之百枝櫻下爲豐樂之時○中天皇歌曰、毛毛志紀能淤富美夜比登波宇豆良登理比禮登理加氣氏麻那婆志良袁由岐阿閉爾波須受米宇受須麻理韋氏祁布母加母佐加美豆久良斯多加比加流比能美夜比登許登能加多理基登母許袁婆、

〔古事記傳四十二〕麻那婆志良は鶴鵠の一名と云り、和名抄には此名は見えず、和名止豆木乎之閉止里とのみあり、字鏡に曉彌左古又万奈柱、また鷦加利、又万奈柱、また鸕豆々万奈柱などあれど、皆詳ならず、

〔日本紀略嵯峨弘仁五年二月甲午鶴鵠萬數集陰陽寮枇杷樹觀人異之、
〔續千載和歌集物名〕にはた、さ
さ夜衣かへすかひなき身にはた、君を恨みて袖ぞぬれぬる